

素粒子物理学実験の現場から

第22回

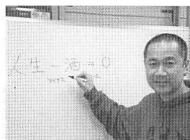
大阪大学 花垣 和則

今回の原稿は、実験現場であるCERNで書いています。ATLAS Weekと呼ばれる実験グループ全体のミーティングに出席するためにやって来ています。3000人を超える大きなグループですから、議論すべき内容が莫大で、その名の通り一週間ずっとミーティングをやるのですが、それでも議論の時間は全く足りません。各パートの現状報告的な内容がほとんどで、内容を深く掘り下げた議論というのは、こういう大きなミーティングではあまりされません。もちろん3000人が一同に会するわけではなく、せいぜい数百人ですが、それでも深い議論をするのは人数が多過ぎます（話は飛びますが、国会ってあんなに大勢いたら、決まるものも決まらんだろうと、身をもって感じてしまいます）。

でも、私のように普段は大学にいるスタッフにとっては、実験全体を俯瞰する非常に良い機会になります。と同時に、何よりも大切なのが、自分のプロジェクトに関わっている人たちと直接会って話をできるということです。

たとえば、私たちのグループの博士課程の学生は、トップクォークの生成確率を測定し、その結果を論文にまとめようとしているのですが、その解析方法を巡って議論が沸騰。グループ内の最終承認まであと一歩というところで止まってしまっています。普段は主にメールで議論をしているのですが、物事を進めるためには、やはり関係者と会って話をするのが一番。科学者というと、感情を押し殺して、数式や数値だけを扱っている変人のように思われるかもしれませんが、そんなことはなくて、皆、血の通っている普通の人間なんですね。物事を進めるには、熱意や誠意を伝えることが重要だという場合も結構あります。

そんなわけで、延々と行われているミーティングに出席しつつ、実際に私たちのグループがやっている研究と関連のある人たちとの打ち合わせをこなしているのですが、大きな問題が一つ…大学では修論提出締め切り間際なのですが、私の指導している学生の論文は完成には程遠く、彼の修論原稿のダメ出しをしないとなりません。それをするのはミーティングも打ち合わせもない深夜。うーむ、眠る時間が…。



著者紹介 花垣 和則 (はながき かずのり)

大阪大学大学院理学研究科・准教授

CERNでLHC実験に参加